
短篇集_現代

月影舞月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短篇集―現代

【Nコード】

N9929P

【作者名】

月影舞月

【あらすじ】

事実は小説より奇なり。この世の中には様々な物語が溢れかえっている。だが、それを見る機会は一生涯のうちに殆ど無い。だったらそれを視るために現代社会を舞台に小説を書いてみればいいじゃない！ 何個も書いたら一つや二つはあるかもしれないよ？ ……そんな電波を受信しました。感想を書いてくれるとありがたいです。

日常的一幕での我が思考

携帯電話というのが登場してから、自分たちの生活は楽になった。おかげで公衆電話は減ったが、最近はテレビが見れたり、インターネットが出来たりとどんどん便利なものになっている。高校生活真最中のオレも、その恩恵に預かっているところだ。

『やっほ、みっきー。元気だった？』

「おう。そういうお前は？」

遠く離れてしまった幼馴染とこうして会話ができるのはそのおかげだと自分でも思う。この間、親に携帯を買ってもらってからという定額制度を利用して、疎遠になりつつあった幼馴染——ちなみに女だ——とこうして話ができるのもそのおかげだろう。

学校での愚痴をお互い聞かせ合って、二人で和気藹々（わきあいあい）と会話を楽しむ。

けれど、長くなってきたので、「じゃあ、また今度」といつて終わりの挨拶を済ませて通話を切る。ダレてこない、ちょうどいい時間帯というのをお互い解るようになってきた。携帯をそこまで多く使わないオレは、月イチの電話を案外待ち望んで日々過している。

じゃあ何で月イチなんだ、と言われても。彼女の時間が取れるのが一ヶ月に一回くらいだというからだ。——その他には、単純に“完璧に暇”な時間が取りにくいからという理由があるが。

椅子から立ち上がって、グイッと伸びをする。冬休みにもなると、月イチの電話以外にもすることが増えてきている。

読書でもしようかと思い、机の隣にそびえ立つ本棚を見る。だが、そこに並んでいるのは以前読んだことのある本ばかりだ。仕方ないから、行きつけの本屋にでも行こうかと思案する。

すると、母さんが「そういえば、ニシちゃんの新刊出てきたか見てきてくれる？」と部屋に入ってきた。それならちょうどいい、と

思いオレは「あいさつ」と返事をしてから家をでた。

欲しい本と言っても特に何も無い。そう考えると外に出たのは意味のないようなことに思えて、自分勝手に意気消沈する。家から少し行ったところには県の中心地になりつつある隣町に入る。行きつけの本屋はそのど真ん中にあるくせに老舗の風情を保ち続けている珍しい店だ。

明らかに昭和当初より以前より存在しているだろうその店は、もうすこし現代的にしても良いのではないかと思えるくらいに時代に逆行している。そんな雰囲気はなんとも言えずに、個人的にはたまらない。まるで世界とは別の場所に存在する異世界のような気がする。すると、オレは早くその異世界に行きたがっている事に気づいて自分で微笑した。

途中、のどの渴きを覚えて飲み水がある公園に立ち寄る。人気もない、廃れた公園で喉を潤していると、近くから怒号が聞こえた。一体なにかと思って水を飲むのを中断してそちらを向くと、髪毛を茶と金の色に染めたギャル風の女性が携帯電話に向かって罵倒を繰り返している。内容は彼氏の浮気がどうこうで、彼氏のほうも言いがかりだと言いつけている。

携帯でケンカすることもないだろう、とオレは思う。浮気とか二股ならば、相手の携帯を見れば済む話なのだ。人気がないとは言え、市街地でそうわめくことだろうかと思いつつ、オレはその場を後にした。

本屋に行くと、顔見知りになった店主が気前良く話しかけてくる。そこで、オレは彼に先程のことを話した。すると彼は困ったように笑うと、

「最近とは違って、些細なことでケンカするようになった。な

んていうか、短気になってきている気がするよ」

「へえ、つてことは、おっちゃんが若い頃はそんなことなかったの？」

「ああ、夫婦円満だったねえ。昔は手紙しかなかったからだろうね」確かに、手紙だったら上手く隠れて書かないとすぐにバレてしまう。そんなのでは、そう簡単に浮気などをしようとは思えないだろう。けれども、不倫とかだったら昔からあったんじゃないか？

「昔からあったよ。だけど、今ほど多くはないさ。それに、ここまですぐ荒々しい対応はしない」

そうなのか。……あ、おっちゃん、おすすめの本とかある？

「いきなり話が変わったねえ。オススメの本だったら、やっぱ『偽^ぎ一人間』っていう本だよ」

そういつて、おっちゃんは奥の本棚からその本を取り出す。定価を確認してから、それを買った。奥から出してくる本は売れていない作家だけれども面白い作品が多い。もちろん、万人の尺度で、だ。マイナーな作家っていうのはすぐに絶版してしま。その辺り、おっちゃんは解っているみたいだ。

あと、ニシちゃんの作品、でてる？

「ニシちゃんはスランプみたいだね。最近、新刊は出てないよ」

「ありゃ、そら残念」

なかなかどうして、人気作家はスランプなしには小説を書けないのだろうか、と考えを巡らせる。ニシちゃんというのはマイナーな人気作家で、顔は出してはいないものの幻想的な舞台と神秘的な文章が人気の源泉らしい。文に神秘的もないとは思うのだが、読了したら「面白い」の一言に尽きる。そこをオレは気に入っている。

母さんはニシちゃんが無名の頃から知っているらしいが、初期の頃に出された本は絶版モノで、売り方によっては数十万をくだらないらしい。マイナー作家っていうのは大物作家よりも稀少価値が高いのかもしれない。

そういえば――昔に比べて、この店に来る人も減っている。少な

くとも俺にはそう感じられるから、そのあたり、どうなの？

「最近、電子書籍って流行ってるでしょ」

「ああ、LEMON社の出してる機能的ケータイってヤツに付いてるよね。電子書籍の機能が」

「それさ、文章の中身とか密度は変わらないのに、値段が十分の一より小さくなっていてさ。それで、お客様もだんだんそっちを選ぶようになってきたみたい。ずっと前からココに来てそのままなのはみっちちゃんの家族くらいだと思うな」

「オレはこの間から来ていると思うけど。それにしても、電子書籍ねえ」

それもまた、携帯電話に付いているのだ。もともとケータイは人と話すために作られたもののに、インターネット機能にテレビ機能——思い出すだけでも十数個も無駄な機能が付いている。そんなモノがなかったら、料金が今の何分の一かになっているんじゃないか、と思う。

でも、それが普通にやるよりもお手軽で、安いことも事実だっていうのはオレも認めざるをえない。ただ、オレみたいなアナログ人間は機械化についていけないのだ。

おっちゃんもその一人である。

「まだ三十年前は良かったよ。バブルの頃は、機械がそんなになくても、モノがなくても皆幸せそうに暮らしていた。自殺なんて馬鹿なまねをする人も少なかったのに……もったいないねえ」

もったいない、という言葉にオレは引っ掛かりを感じた。もったいないのは、命だけだろうか。昔に比べてオレたちはモノをすごく多く使用するようになった。携帯の機種替えもポンポンする。なんの意味があるのかと、思いつつ、しばらくの間談笑を楽しんだ。

帰ってから母さんにニシちゃんが新刊をだしていないことを報告してから、オレは母さんに心中を吐露した。すると母さんは、そう

ねえ、と小首を傾げる。

「私が子供の頃にはポケベルってあったんだけどね。ケータイはやっぱり、無駄な機能だと思うなあ。あの鉄の塊、無駄に性能上げているだけじゃない」

その言葉に苦笑する。母さんも釣られて苦笑して、でも、と付け加えた。

「やっぱり、ケータイができてから便利にはなったわよ？　ただ、こういうの」そういつて先程まで読んでいたらしい新聞のとあるページを見せた。そこには、ケータイでのチェンメで自殺した人の親族の言葉が書かれていた。その言葉は、オレの考えていたケータイやパソコンでのEメールなどの問題点を指摘するような文章だった。母さんはそんなことは知らず、若干悲しそうな表情で、

「私が子供の頃はこんな莫迦みたいな自殺を考える人はいなかったわ。こういうっちゃ、なんだけど。昔と比べてピンポイントでの“言葉の攻撃”が増えたと思うわ」

「ああ、死ねとか、消えろとか。そういうの？」

「そうそう。私だってそんなことを言われたら嫌だけど、言い返して終わるか、何かをしたわよ。顔を合わせての悪口の言い合いだったからね」

「昔は、な」

やっぱり、ケータイとかパソコンができたことで発生したいこととわるいこと——陰と陽となる二つの面があったんだな。そこからは軽く談笑して食事をとった。だけど、オレは……ケータイというものがいらぬものなのだという考えがまた、膨らんだ。

しかし、自分の近くでありえないからといえど、本当に人は死んだりしてる。警察沙汰にもなっているから、やはり影響力というのは大きいのだ、とオレは思い直した。

なんとなく気分が悪くなって、オレは月イチと決めていた電話を

もう一度かけた。もちろん相手は幼なじみだ。昔から何かがあったらいつも話をしていた覚えがある。

数回呼び出し音になり、通話がつながった。

『珍しいねみつきー！ なになに、私が恋しくなった？』

「そういうわけじゃあないけど。でも、そうかもしれない」

オレがそう言うのと向こう側で幼なじみが息を呑んだ音が聞こえた。驚くことか？

「なあ、ケータイってどう思う？」

『……藪から棒になによう。まあ、私は便利だと思うよー？ みつきーにもこうして話ができるしねーっ』

「そう言ってくれるとありがたいけど。チェンメとか、送られたりしてない？」

『私にそんなのが送られてくるわけ無いじゃないの』

苦笑交じりの声が響く。この元気な声は鬱々としていた暗い心を明るくしてくれる。

「でもさ、ほら、人が死んだりしてるじゃん。やっぱり、オレはいらないと思うけどねえ……ケータイ」

『あ、それは私も思ったことある。けど、』

そこで彼女は一旦言葉を区切る。

『例えばさ、私たちがこうして話すことが出来ているのはケータイのおかげじゃない？ 固定電話だったら携帯できないし。一番の利点っていうのは“携帯できる”って所にあると思うの。ならなんでメールがあるのかとか聞かれたりしたら……答えが難しくなるなあ。でも、電話する時間がないからメールを使うっていう方法とか、そういうのでメールは必要だと思うの』

「ん……まあそうかもしれない」

『でしょ？ それに、人が死んだりしてるって言ってたけどさ……』

……実は、この電話とか盗聴されている可能性高いのよ』

「えっ？」

驚きがつい口を出してしまう。きよろきよると部屋を見回して、盗聴

器が仕掛けられていそうな場所を手当たり次第に調べようとする、その様子を彼女は想像できていたらしい。

『違う違う。携帯って電波使ってるから、傍受できたりするのよ。たまにだけど、私も成功する。これって、企業側政府側は解っていることだと思うんだ。だったら、政府とかはそれを応用して悪質な電話とかメールを規制すればいいと思うのよ』

「今でも届け出たら警察が調べてくれると思うんだけど、ど」

椅子に座りなおして、彼女の電話を続ける。

『それでも、法律に引っかかっていなければ調べても相手に注意する程度で終わるじゃない？ それってやっぱり、私としてはいただけないわけよ。……まあ、でもさ、ほら。携帯電話じゃないと行けない会話とかあるじゃない？ 誰かに聞かれたくない会話とか、あるでしょ』

「うん、まああるね」

『そういう時はさ、携帯電話がないとだめじゃない？ 急に妻の声が恋しくなった夫が電話をかけてきたりとか、ドラマとか見てたらあるでしょ。それで、夫のほうも妻の方も声が聞けて嬉しい。……そう思えば、携帯電話っていうものは必要だと思うな』

「……うん、そうかも知れない。もしかしたらオレが電話をかけたのは、そういう心情だったのかもしれないね」

『え？ ちょっと、今のって——』

「それじゃあね」

彼女はなにか言っていたがオレは気恥ずかしさから電話を切った。そして——彼女に思いを伝えることができたこのケータイに感謝した。

日常的一幕での我が思考（後書き）

今まで個別で投稿していた短編をこちらにまとめました。

聖夜くSaint night. 僕と愛しい人く（前書き）

お題..クリスマス

聖夜 Saint night. 僕と愛しい人

僕の家では、サンタクロースを全く信じていなかった。

三年ほど前に、小学三年生の妹が「サンタさんからプレゼントがほしい」だなんて言い出した。初め、僕も父も母も「サンタさん」を知り合いにいる「山田さん^{さんた}」のことだと思い、あらゆる手段を用いて妹を説得しようとした。だが、妹が両親と僕の誤解を解くと、はてどういう風の吹き回しか、我が家に赤い服を着たまさに「サンタクロース」なるものがクリスマス夜の夜に現れるようになった。

僕は巷で両親がサンタクロースをする、と聞いていたのだが彼が現れるときには両親は僕達の前にいて、彼を歓迎している。では彼は何者なのかと疑問を抱いて、冬休みにも関わらず暇をしていた友達に話をすることにした。

午前中に家を出たときにはもう雪は降り始めており、それなりの防寒対策をしなければいけなかった。公園で待ち合わせをしていた友達が来たときは、まるでエベレストに行く登山者の格好のよう、体を温めるために飲むうとしていた缶に入った紅茶を思いっきり吹き出しそうになった。

それに対してむっとした表情を作る。僕は苦笑して友人に呼び出した理由を語った。

「実は、サンタクロースの正体について知りたいんだ」と僕が言うと、鳩が豆鉄砲を食らったような表情を作った後に本当にどこからか飛んできた豆鉄砲の弾丸を後頭部にうけて思いっきり痛がった。友人は涙目になりつつもスルーすると、僕の疑問に苦笑しつつ、

「お父さんかお母さんか、それとも親戚じゃないのか？」

「いや、そのセンは僕も考えた。けれど、親戚ならばその日に泊まっていなくてはだし、両親はサンタが来るときに僕の目の前にいるのだから、ありえない」

「……へえ、それ、ほんとうに見てみたいなあ。何、プレゼント本当にくれるの？」

「ああ、僕は何も頼んでいないのに何かしらくれる。主に本だね。妹には、なぜかは知らないけれども赤い靴下の中に入っているメモ用紙に書いてある通りのモノをあげるんだ。……赤い靴下を用意する理由が僕にはわからないだけだね」

「へえ、それは君の家族にお得なサンタクロースだな」

と羨望のまなざしとともに僕に言う。僕の座っていたベンチの隣に座った彼女は女のくせに男としか思えない口調で続ける。

「考えるとすれば、ひとつは」右手の人差指を立てる。けれども、彼女は髪についていた雪を鬱陶しそうに見ると視線だけで僕に合図を出す。それに従って彼女の髪に触れる。滑らかな髪から白い粉が落とされて、彼女はありがとう、と言ってから「近くにそのようなボランティア団体があつて、そこに頼んでいる」

しかし、それではプレゼントの費用はどこから出ているのか？

ボランティア団体だとしても人のモノのために金をそこまで使うような団体は余り無いと思う。

「もしかしたらそういう団体なのかもしれないけど。まあそれはどうでもいい。頼んでサンタクロースをやってもらい、あとでお金を払う」

「謝礼か」

「うん。それで、二つ目は君の両親の友達か、それともお世話になっているお礼にそのようなことをしているのか。……けどまあ、ここで私たちが考えても詮なきことだが」

その言葉で、僕は納得した。すると彼女に言いようのない罪悪感が生まれる。

「あー……ごめん、時間勿体無かったよね」

「いや、私も暇だったからいい。貴重な時間、君と使えて嬉しかったぞ」

「ありがとう」

彼女は若干顔を赤くしながら踵を返すと、思い出したように振り返った。

「そういえば、赤い靴下を用意する理由だけど。プレゼントを入れるためだと思うぞ？ 本職のサンタがそれに入れるかどうかは解らないけどな」

と言ってつかつかとこちらに歩み寄ると、僕が飲みかけていた紅茶を奪い取ると今更ながら自分に弾丸を当てたワルガキを探し始めた。

彼女から答えは得られなかったために、僕はクリスマス聖夜である同日、サンタクロースが来る瞬間を目撃しようと玄関前の茂みに茶色のダッフルコートを着てじっと待機していた。彼が来るのは例年、九時頃だから、その十分前に出ておけば良いだろうと思い、現在胡粉が経過したところだ。

吐く息が白く、朝からずっと降っている雪はすでに積もり、僕の足首まで届いている。そろそろ来るだろうと思ったとき——どこからか、鐘の音が聞こえた。不思議と僕のココロはそれに惹きつけられて……音源を発見しようとあたりをきょろきょろと見回す。だが、音源はどこにも見えない。ありえないと思いつつ上を見てもぽっかりと浮かんだ月が聖夜を彩っているだけで——あれ？

月に黒点があるはずがない……よな。

その黒点はだんだんと近づいてきて、はっきりとした輪郭を帯び始めた。……間違いない、どこからどう見ても人の影にしか見えな。ふわふわの髪が風にそよそよ揺られている。落ちてきているのだから重力加速がかかるはずなのに、——そよ風を受けているように彼の長い白髪はたなびいていた。

— Merry Christmas.

そう、彼が僕をはっきり見て言った。その時には彼は僕の真横に音もなく降り立っていた。驚いて僕が彼を見る。メガネをかけた彼は肩から下げていた大きな赤い鞆から一冊の本を取り出すと僕に手渡す。

「入っていいかな？　　というか、君も入ったほうがいいだろう」

という彼——間違事無きサンタはそう言う、我が屋に入るように僕の家に入った。それに続いて僕が家に入ると、勢い良く妹が彼に飛びついた。「おにちゃんおかえりなさいっ！　サンタさんお久しぶりっ！」

「お久しぶり。今年のプレゼントは——」

そう言ってサンタがラッピングされたプレゼントを妹に渡すと同時に、家の奥から両親が出てきた。二人はサンタを居間に通し、家族全員に、いつもの通りサンタと食べる食事を並べ始めた。

サンタは僕に視線を向けると、目だけで『どうやって現れたかは言わないでくれよ』と言った。……脳に直接響いたような感じもしたが、それは気のせいなのだろう。僕は無言で頷いた。サンタはそれに対してクスリと笑うと、食卓についた。

その夜、初めてのことが起こった。毎年、サンタは一泊するときには家の何処かの部屋に入っていた。なのだが……どうやらその部屋に処分するゴミなどを全て放り込んでいるらしく、運悪く(?)僕の部屋にサンタが来ることになった。

サンタと一緒に寝るのはなんというか、別にむさい男と寝るわけでもないのに気にするほどのことではない。僕はすんなりとその提案を受け入れた。受け入れた。うんそこまではいい。

……どうしてこうなった。

お風呂の中で僕はそう、口の中でつぶやいた。我が家のお風呂は、父が無理矢理に贅沢しようといいいだして増設し、お風呂だけは軽く

五人がはいれるほどの大きさになっている。無理やり詰め込んで――勿論そんなことはないだろうけれども――大の大人が住人は入れるようになっていく。そう、とにかく大きいのだ。だけれども、ここに多人数が入ることはまずない。父が会社の同僚と宴会をやったときに、皆でお風呂に入る事になってむさい男達ばかりでここに入ることはあるだろうが、その場合でも僕は多人数のお風呂を経験したことはない。

初めてが取られたというのはこの状態で使うべきなのだろう。

僕の初めては二つも取られた。一つは多人数でお風呂に入るという初めて。もうひとつは……女の人とお風呂に入るという初めて。そしてサンタさんが女だと初めて知った。それも含めたら三つだ。

事の始まりは、僕がスポンジを泡立てて体をこすっていた時に、唐突に扉が開いたのだ。驚いて振り向くと、後ろにはタオルを胸の下から巻いたサンタさんがいた。はじめは彼女も僕も驚いた表情を作っていたが、彼女は慣れていたので、「背中を流してあげよう」と言って、半ば強引に僕の背中を流し始めた。

少しくすぐったかったが、気持ち良かったのが本音である。だが直後に、「お礼はいいから私の背中を流してくれ」と言われたら……誰だっけすぐに泡を流してお風呂の中に入りたくなるものだろう。彼女は若干残念そうな表情を作ったが、体を洗うと、お風呂の中にはいった。そんな時も彼女は波ひとつ、音一つ立てなかった。僕は驚嘆した。

「隣に座ってもいいかな？」

「え、あ……いい、ですけど」

僕がそう答える頃には、すすつ、と僕の隣にいる彼女は、タオルをお風呂の縁に畳んでおいている。頬が紅潮して隣を向けない。だけれど、聞きたいことがあった。

「えっと、――」

「ああ、サンタさんでも、お姉さんでも、おばさんでもなんとでも

呼んでくれ」

「じゃ、じゃあサンタさん。……宇宙人？」

その質問にキョトンとすると、直後、彼女はくすくすと笑い始めた。なんだか馬鹿にされたような気がして、「じゃあ何者なんですか」と若干不機嫌な声色で質問する。

「馬鹿にされたと思ったならすまないな」という限り、僕の考えはお見通しのようだ。

「そんなことはないぞ？ 私にだって解らないことはある。……例えば、私の正体もそうだ」
「え？」

自分の正体が解らないなんて、それはおかしいと思う。僕は僕が人間であることをはっきりと自覚している。だから僕の正体は僕の名前を持った人間なのではないだろうか？

「君の場合はそうかも知れないがな。……私は、少し事情が違うのだ。“サンタクロース”という代名詞に成り下がってから、墓私は……まあ、人に自慢できるようなことは今までしていないよ。その代わりに、子どもに喜ばれたことはあるがね」

「……そうなんですか」

「一応、君の家族とは個人的な付き合いだ。……特に君は、子供の頃から私と会っているんだけどね。気づかないとはなあ」

「え？」

……最後のほうがよく聞き取れなかった。だが、サンタさんは苦笑して「なんでもない」と言うと、思い出したように若干うつむき加減だった顔を上げた。

「なあ、すまないが……君のパジャマ、貸してくれないか？」
「……え？」

お風呂から上がってから、僕は適当にパジャマを見繕ってサンタさんに渡す。勿論視線は顔から上限定である。さきほどタオルで待

つのはなんだから、と貸したワイシャツは豊満な胸に内側から押されて第二ボタンから下までしか止められていない。谷間が若干見えて、思春期の僕には刺激が強い……と一人勝手に言うものの、実際のところ少し目に入った瞬間に視線を逸らしている。刺激は強すぎるようだ。

「あ、あの、……向こうを向いておいてくれ」

恥ずかしそうに彼女は言うのと、僕は無言で頷——こうとして、胸の谷間が見えたところですぐに後ろを向いて、ガチガチに体を固めながらも数歩先に進む。傍から見たら下手に作られたロボットが編に動いているように見えただろう。

後ろからワイシャツを手渡される。その時に彼女は僕から離れているはずなのに胸が当たっていて、騒いだら騒いだで変に思われるので、喉の奥まで出かかった奇声を必死で押しとどめながら、僕はぬくもりが残っているワイシャツをすぐにたたむと、そのままクローゼットの中に放り込んだ。ホールインワン。

「も、もうこちらを向いていいぞ」

そう言われて振り向くと、何故かベッドの上で綺麗に正座している彼女がいた。……え？ このまま一緒に寝ろと？

サンタさんはコクリと肯く。悩みに悩んだ末（と言っても数秒だが）に、僕は「失礼します」と言って自分のものとは思えないベッドに入る。……生まれて初めてこんなに緊張してベッドに入る。サンタさんも「しっ、失礼すりゅっ……うあ、噛んだあっ……」と、いつもの冷静そうな態度とは裏腹に顔をゆでダコのように赤くしながら、ベッドの中に入る。

ああ、今日ほど枕がひとつだけであるということが恨めしい。

といっても、全く寝付けなかった。近くの部屋である両親はどうやら情事中らしく、壁から少し音が漏れている。……それがどれだけ気まずい雰囲気を作り出していたか、彼らには全く解らないだろう。

う。

と、手の先が少しサンタさんに触れたので僕は慌てて手を引く。彼女の顔を横目で見る。……と、その顔は、どこかで見たことのある顔だった。

いや、思い出すまでもない。今日の朝、僕と話したばかりの——…友人がそこにいた。驚いて声が出ない。思考が混乱してあんなというか……

「……起きてる？」

「う、うん」

若干上ずった声で僕は答える。彼女は僕の考えがすでに解っているようで、「……今まで騙しているようでごめん」と言った。話を聞くと、子供の頃からサンタクロースに憧れていた彼女は、ある日サンタクロースになりたいとサンタさんに言ったそうだ。実は彼女の両親は事故で亡くなっており、それがクリスマスの日だったという。それで、彼女はサンタクロースの国に連れて行かれ、体の成長を遅くする“魔法”をかけてもらい、修行したという。

それで立派なサンタクロースとなった彼女は、その“魔法”を解呪し、自分の思うままに外見を変化させるという魔法を習った。それは夜中の十二時までしか続かないという、シンデレラに出てくる魔法と似ているものだった。

そして、今日。何故僕の部屋に泊まろうかと思った訳を彼女は答えてくれた。

「……いままで言い出せなかったんだけど、私はきみが好きなんだ。今まで使っていた口調とかもまるっきり作った口調で……騙しているような感じだったんだけど、私はきみが好きなんだ」

二度続けて、彼女は僕の目をはっきり見て言った。それで、僕も踏ん切りがついた。

「……騙されていたのは、すごく悲しいよ」

「……ゴメン」

「許すつもりはないんだ」

「……ごめん」

「でも、君のその素の口調も、作っていた口調も。僕は好きだよ」
「——え？」

彼女の手を握る。顔を横に向けて、彼女の目をはっきりと見る。

そして、僕はそのまま彼女の柔らかい唇に自分の唇を重ねた。んつ、と若干苦しそうな声を彼女はあげるが、僕は手を伸ばして彼女を引き寄せた。

体が密着する。僕は、唇を離して、言った。

「愛しているよ。僕の愛しい人」

聖夜くSaint night. 僕と愛しい人く（後書き）

落ちが駄目だったエ……

P. S.

リア充乙。これ現実にあったらそいつらにインタビューしていろいろ聞き出してやる

銃弾は夜に飛ぶ

——今宵は良い夜だ。

彼は月を眺めながらそうつぶやいた。通り過ぎる雑踏の構成員の一部が彼を不思議そうに見る。夏だというのに黒いコートを深々とかぶり、大きな帽子をかぶった丸いサングラスをかけた彼は、たしかに一般人から見ればおかしな格好をしているだろう。

耳に付けているイヤホンから遠く離れた場所にいる“組織”のオペレーターが今回の任務の説明をしている。そんなことはどうでもいいとすぐに切り捨てた彼は、ただ一つ、「敵の殲滅の許可を」とオペレーターに言った。

オペレーターの女性は組織長に回線をつなげると言い、それを聞き届けた彼は夜の街を歩いて行つた。ネオンの光が彼のコートに吸い込まれていき、闇へと葬られる。彼は誰も寄り付かない入り組んだ裏路地を通り、その奥にひっそりと佇むライブハウスにたどり着いた。

『命令はただ一つ。——潰せ。我々（カトリック）に刃向かう異教徒共を生かして返すな』

「了解。見ている主人、我々に刃向かう者共の末路というものを。」

教皇猊下への報告は忘れるな

『了解。一人残らずくびり殺してやれ、下僕』

ライブハウスの扉を内側に押す。ぎしぎしと木製の扉は音を立てながら開いた。異様な格好の客人にライブハウスの入り口に経っていた受付の女性——ではなく、ガラの悪い男達は彼を一瞥したが、ここに来る者はどうあっても“闇”に関わる者だ。同類がまた増えたと思いつつ、彼らはまた思い思いに自分の行っていた作業を続ける。

麻薬の取引、拳銃の密売、——『ライブハウス』と名のついたそ

の建物は、違法な取引所だった。彼は一言も発さずに奥に進んでいく。奥にもまた木製の扉はあった。彼はそれを無言で蹴り開けると、中にいた男達は驚きを隠せない様子で彼を見た。

「誰だお前は！」 「誰の許可を得てここへ入った！」 「貴様何者だ——！」

先程の奴らとは大違いだな、やはり“クロ”だ。そう思いつつ彼は無言で中に入る。

「共産主義掲げる帝国^{ナチ}の残党に用はない。——Amen」
黒いコートの内側から取り出したのは、それまた黒く、闇^{くろ}く、漆^{くろ}い拳銃。しかしその大きさは拳銃の枠に入ったものではない。48口径を優に超え、18mmという規格外。銃身^{バレル}は通常の拳銃とは違い、これは二十センチほどある。こんなものは“人間ならば使えない”。

「お、——まえは、一体な」

その言葉を遮るように、彼の持っている銃が火を吹いた。打ち出された炸裂弾は吸い寄せられるように言葉を発していた男の額に突き進み、突き刺さった瞬間に男の顔面を上下に分けた。脳梁と血が飛び散り、周囲にいた男達につく。一瞬それを何か解らなかつた男達は、一発、もう一発と打ち込まれた弾丸によって腕を、心臓を、脚を穿たれた。ようやく敵の襲撃と理解した男達は、サブマシンガンを取り出して彼に向かって撃つ。連続した発砲音と共に、彼の体は穴だらけとなって、手も足もバラバラにされた。

^{ライブハウス}あまりにもあっけない終わりかたに男達はあ然とする。だがこの場所では殺しは日常茶飯事だ。『お客さん』は気にすることはない。

「なんだったんだ、一体……」

「おい、こいつの首にかけているモノを見ろよ」

男達のうちの一人が怖がりもせずに彼の残骸に近寄ると首にかけていたネックレスを手に取り、仲間に見せる。ぞろぞろと集まってきた仲間たちに、男はいった。

「こいつ、カトリックだ」

「カトリック？　もしかしてこの間、俺たちが金を奪ったやつ仲間か？」

「多分そうだろう。……それより、どうする？　計画のためにはコイツに殺されたやつらの文を補充しないと――」

と、――そこで、なにか変な音、強いて言うなら砂をこすり合わせる音が周囲に響いていた。なにかと思って彼らは周囲を見回していたが、そのうちの一人が顔をこわばらせながら“残骸”を指さしていた。なにかと思って彼らは皆、それを見た。

「この程度で吸血鬼^{オレ}は死なんよ。吸血鬼に銃は、ムダだ」

彼の腕が、脚が、腕がすべて塵と化し、頭部を中心にしてその体を作っていく。そして再生している途中の彼の頭部が彼のネックレスを持っていた男に伸び、その首に口づけた。ミシミシと骨が軋み、男の首の骨は彼に噛み砕かれた。頭部と胴体が分けられる。底から流れる血を浴びるように彼は飲む。

「う、あ、あああああああっ！」

その光景を見て恐慌状態に陥った男の仲間の一人がサブマシンガンでフリードを撃つ。だがそれは男の体に突き刺さるだけで、その奥からその体を貫通しながら一発の銃弾がヒュレムを撃っていた男の肺を貫いた。

「合計で、ヨン」

彼はそのままサブマシンガンを取り出そうとしている男達を撃ち殺し、マガジンを落とす。

「これで六」

腰に付けていたホルダーからマガジンを取り出すと、それを拳銃に差し込む。そしてサブマシンガンで撃ってきた男達に肉薄した。銃弾をもろに受けながらもダメージを見せない彼に男達は恐慌状態に陥っている。この程度でこうなるのは予想外だと思いながら、数名を銃で撃ち殺して目前に迫った敵に手刀を突き出す。それは心臓を捉え、的確に穴をあけた。

「ハチ」

またひとり、またひとりと倒れていく。

「あ、あつ、悪魔め！」

「ほう、悪魔か。――最高の褒め言葉として受け取っておこう」

最後の一人が隠し持っていたワルサーPPXで何度も何度も彼を撃つ。血を流しながらも彼は進む。

「オレの仲間から見たら、お前たちは悪魔に見えただろうなあ？」

――どうだ、悪魔に殺される悪魔よ」

「お、おれは上に命令されただけだッ！」

「ほう？　上か。――『話せ』」

彼の目が奇しく光った。^{あや}それが魔眼というものの一種だと気づく前に、男は魅入られていた。ひとりでに口が敵の質問に応えていく状況を彼はどう判断しただろうか、その時には意識は飛んでいただろうが、質問が終わった瞬間に、彼は男の眉間を撃ちぬいていた。ヒュレムはトランシーバーで本部に連絡を入れる。これから大本を潰しに行く、と。

その表情は、さながら悪鬼のようにゆがんでいた。

数日後、ヒュレムが倒した男達の組織は壊滅した。たった一人の手によって、数百の人間が殺された。それは殺人ではなく“殺戮”。そして、人間でない彼に人間の律法は通じない。人間を捨てた“吸血鬼”は、悪魔にも天使にもなるのだ。

彼は自分の組織の本部に戻り、自分の主人にあった。開口一番アルゼンチンに残っている残党を殺して来いという命令が出された。

またか、と思いつつもヒュレムは口を開く。

「まったく、君は人使いが荒い女だな」

「私は吸血鬼使いが荒いだけだね」

「違ういな」

悪魔と称された男は、彼女のための天使であつた。

銃弾は夜に飛ぶ（後書き）

テーマが悪でもあって二面性でもあるエ……

まあ戦闘シーンはそれなりに上手くできたと思いますっ

P・S・

HELLSINGを読んだ結果がこれだよ！

絶望を呼ぶ家

——とん、とん、とん。

僕がその足音を初めて認めたのは三日前のことだった。空耳だろうと思っていたが、どうもリアリティがありすぎる。一体なんなのだろう、と思いながら僕はその正体について調べだした。

思いの外すぐに正体は解った。けれど、それを両親に言おうとはしなかった。

だって、こんなことを言ったら鼻で笑われて信じてもらえない。だったら自分たちで体験して、自分たちでその恐怖の深さを味わって、それでも信じなければ……………。

怖くて、僕はそれから先を考えることが出来ない。

けれど、信じるものは救われるという言葉は本当なのだということがよく解った。

明日は、庭に来る小鳥も『彼』について気づくのだろうか——



私は、窓越しに彼らを見ていた。ニヶ月ほど前に引越してきたこの一家は、いつもいつも同じような行動をとっている。日が昇ると起き、それから少しして歯磨きをしてテレビを点け、それを十分ほどみる。その後家族全員で食事を取り、息子は学校に行く。居なくなった途端に男と女は喧嘩を始め、売り言葉に買い言葉。近所迷惑もいいところだ。

昼頃になると家には女の生徒が来る。女は英語の教師をしていた。女が生徒に教える姿はいつもの彼女の真逆で、見ているこちらは笑いをこらえ切れずにくく、と笑い声を漏らしてしまった。

男の方は今を占領してなにか実験をしていると思ったら、昼寝を始めたり、歌を歌い始めたり……見ていて奇怪だった。

ただ、一点。……その家に住み着いている『何か』の気配を私は感じ取っていた。



小鳥がじつと俺を見ている。実験を途中で放り出した俺のことを叱っているのだろうか。叱ってくれるのならどれだけありがたい事か。最近何かをしようにもやる気が起きない。実験は成功し、機械の売れ行きは、まあまあ。

けれどこの家に移ってきてから、何かが足りない。前みたいに大きな成功もなければ、大きな失敗もない。それだけリスクも少ないのだから良いのだが、この不思議な感覚はなんだろう？ 俺は首をかしげて考える。

——とん、とん、とん。

誰かの足音が聞こえて、俺は驚いて立ち上がった。廊下へとつながる扉をあけても誰もおらず、二階にもだれもいない。すると妻が英語を教えるのを中断して、部屋から出てきた。それであたりをきよろきよろと見回して、俺と顔を合わせると「いま、誰かいなかった？」

「いや、俺も居ると思ったんだがなあ……いったい、誰だろう？」

まあ、空耳かも知れないわねと言って妻は部屋に戻った。

ただ俺には、その音が空耳のようにには思えなかった。心配になって、二階に上がって息子の部屋の中、寝室を注意深く観察してからまた一階へ戻り、書斎や物置を見てからまたリビングへ戻り、自室を開けようとして……

——とん、とん、とん。

また、聞こえてきた。

一体、なんなのだろうか。この音は。



うぐいす張りの床の上を何かが歩いている。先程から聞こえる、小さな、それでいてよく響く足音の持ち主は誰なのだろう？ 私は生徒に授業をしながらそんなことを考えていた。足音の大きさから体重が軽い人間であることは察しがついた。ということはガリガリに痩せ細った男なのだろうか？ 少年などにしては足音が落ち着きすぎている。しかし少年だという線も拭えない。けれどもしかしたら、屈強な体格をした暗殺者なのかも？

私は妄想をふくらませながら、生徒への授業を続ける。

すると突然、生徒――アカネちゃんが口を開いた。「先生、あの足音ってなんだと思いますか？」

「あら、あなたも聞こえていたのね。……さあ、何かしら。私はここに住み始めてから日は浅いし……」

「実はね、先生」とアカネちゃんは私にとっておきの秘密を教えるときのように瞳を輝かせた。「ここで昔、人が殺されたんだって。とても若い人で、強盗に這入られて……死体に首はなく、爪は全部剥がされていて、体じゅうにナイフが刺されていたんだ」

「まあ！」と私は声を大きくして「怖いわねえ。……それで、その人がどうしたの？」とすぐに声を小さくしてアカネちゃんと話を始めた。

「その人、それいらいこの家に“ゆうれい”として住み着いちゃって、入ってくる人入ってくる人、みんな殺しちゃうんだって」

「……あらあら、怖いわあ」でも、噂でしょ？ そう思った私をみてアカネちゃんは小さく笑った。顔に出ていたのだろうか。

「……私のパパなんだ。その殺された人」

「……えっと、話させてごめんなさいね？」「いいのよ。……ただ、覚えておいて？ 先生。――先生の前に来た人は、殺されちゃったわよ」

その言葉が終わった途端に、また……あの足音が響いた。
いったい誰なのだろうか……この足音は。

「先生、私用事があるから帰るね？」

「え、ええ……See you next time」

「See you」

そう言って、アカネちゃんはどこかへいった。

——とん、とん、とん。

アカネちゃんの足音が、あの足音に重なっていた。

幽霊は、人に取り憑くんだよ？ と帰り際に彼女が言ったことを、
ようやく私は認識した。



帰ってきた僕を迎えたのは、父と母の口論だった。ああ、またか
と思いながら僕は歩を進める。

「Vim patior, Vim patior……」

口の中で小さく呟く。そうだ、『彼』の力を借りれば苦しみに耐
え続けることもない——この騒々しい二人からも開放されるのだ。

……そうだ、この屋敷の『彼』の力を借りれば……。

けれど彼は虚像だ。彼は単独で人を殺す力を持たない。あくまでも、
手助けをしてくれるだけだ。

それだけでもいいから、どうか、どうか僕に力をかしてくれ



妻と口論をしている時だった。きい、と小さく扉を開けて息子は

部屋の中に入ってきた。その顔に暗い影が落とされていることに気づいて、私と妻はビックリして口論をやめた。

「どうした？ なにかあったのか？」

「……………ああ、あった」

ぞくり、と。まるで別人のような声を息子は発した。息子は俯いたままで、こちらをみていない。鞆は部屋においてきたんだろうか、肩から提げていなかった。ただ、両手が背中に回されていて何を持っているのか解らなかった。

「ねえ、あんたら。なんなの？ 毎日毎日わめいてさ。耳障りなんだよ」

「あ、ああ……す、すまない。でもこいつが——」 「私がなんですって！？」 あんた、一人で飯食わせていると思ってんじゃないでしょうね！」

「うっさい。少しは僕に話しをさせてよ」

「……………お、オマエは……………！」

親に対してなんて口を聞いているの！ と妻は言った。俺が止める間もなく、妻は息子に平手打ちをしようと右手を振り上げた。

けれど、その瞬間。妻の胸にナイフが突き立てられた。それも一度ではない。もう片方の手に持っていたナイフを反対側の胸に突き刺し、なんども、なんども、なんども繰り返す。最初の一撃で心臓を貫かれていて、既に妻は死に体だ。

「ああ、死ねっ、死ねっ、死ねっ、死ねっ！ 目障りなんだよ、くそがっ」 今度はナイフを抜くと、そのナイフを妻の太ももに突き刺し、ナイフの柄をなんども踏む。そのたびに妻は激痛に身を悶えさせるが、それすらしなくなった頃には、息子の服は、肌は妻の返り血だらけだった。

それでいて、歓喜の表情を浮かべている息子の顔を見て私は総毛立った。

「お、おい……………」

「あんたもだよ、親父。ああ、よくもこの家を荒らしたな。人の努力を踏みにじって俺なら簡単にできるとよくも断言できたな、ええ？　子どもを褒めることを知らないのか。テストで満点をとって学年で一番を取った時も、体育会で優勝した時も、アンタに将棋で勝った時も！　こっちは必死で頑張ったのに、アンタは当たり前とか言わなかった。」

アンタはオレを愛しているのか？　少なくとも僕には、オレにはそうは思えないね。それに不機嫌になるとすぐ人を殴るわ、蹴るわ――

「お、おいおい、落ち着けよ」

俺は恐怖のあまり、妻が死んだという事実を認める心のゆとりもなかった。けれど、息子は何度も何度も繰り返す。「Vim patior, Vim patior, Vim patior, Vim patior……」

ラテン語で、苦しみに耐えるという意味だ。

苦しみ？　俺はアイツに苦しみを与えたことがあっただろうか。

食べ物にも服にも、何にでもあいつのためならば金を使った。一体何が足りないのか。殴ったりけったりが文句に入るらしいのならそれは屁理屈じゃないのか？

「僕はオレは私は、ああ親父、お前を視界から消さないと気が済まない。さあ死ね、しね、死ね、死ね！」

妻に刺さっていた血刀を抜くと、それを俺に突きつけてずんずんと距離を詰める。俺は壁際に立っていたため動くことが出来ず、声を掛けることしか出来なかった。

「お前は何が欲しいんだ？」

「僕は欲しい物なんてない。親父、母さん、あんたらが俺に愛を注いでくれるならそれで良かった。なのにあんたらと来たら……自己満足の正義に酔ってるだけだ！　神様が天罰を下してあんたらを殺すのなら、おれの手で殺してやる」

そういうと息子は声を上げて泣き出した。そしてそのまま、俺に突撃し……

心臓に突き立てられるナイフの痛みの中、俺の意識はまどろんでいた。最後まで、息子に何があったのかが知りたかった。



「ったーく……またか、こんな供述をするホシは」

「ええ、またですよ。一体何ででしょうかねえ……」

「『彼』の力を借りて、僕は願いを叶えましたって？　ただ今回の
はひでえや。あたかもイカれてるときてやがる。こりゃ社会復帰は
無理そうだな」

「ええ、若いのに残念ですよねえ……うーん、上手く行ったら警察
に入れるかも知れないのに」

「バカ言え。知的障害者に一課が務まんのかよ」

「捜査一課はむりでも、経理なら出来るんじゃないですかねえ……」

「まあいいさ。俺達は俺達、ホシはホシ。……ガイシャが両親って
のも、例の『彼』が関わる事件では初めてだな」

「『彼』。一体、なんなんでしょうねえ……」



今回も、また住人が全員いなくなった。この大家もよくここを
人に貸そうと思いつけられるものだ。確かに借り手はつくだろうが、
その代償に何人も死んでたら流石に隠し通せないだろう。そのこと
に気づかないだろうか……

そう思いながら、私はふと、昨日感じた『何か』の気配をまた、
感じ取った。

「いつまでそこにいるのやら。……やれやれ、最初に見たのは私だ
し、最後まで見るとするかね。早く成仏してくれよ？」

そういつて、私は翼を小さくはためかせた。

空は青かったが、私の視線の先にあるものの周囲には影が落とさ

れていた。まるで、世界から拒絶されているかのように。

——絶望という概念は、いつまであの家にとどまり続けるのだろうか。

すれ違う心

あなたはじっと、私の姿を見ていました。私が何をしたのかをあなたはすっかり察しているのでしょう。

ああ、赦してください。あなたを見捨てるつもりじゃないわ。本当に、仕方のないことなのよ。……あなたにはもう届かない。けれど、私は何度も何度も、言わなきゃならないの。永遠に。

……ええ、隆一、私は大丈夫よ。おかしくないわ。ただ、謝っているだけ。

……誰にとって？ ほら、私と家を出たときに、私たちをじっと見ていたあの子。彼は君のお兄さんのよ？ 知らなかったの？ ……

……まあ、無理も無いわね。あなたからしたらお父さんみたいな関係だったから、まだ小学校にも入ってないあなたが解らなくても無理は無いわ。

……え？ ああ、小学校っていうのは、来年になったらあなたが行かなきゃいけないところ。お兄ちゃん——あなたからしたらパパね。パパも昔、そこに行ってたの。お勉強はたくさんしなきゃいけないけど、あなたなら大丈夫だわ。きっと。

パパを何故おいてきたか……か。話をはぐらかさないで、だなんてあなたの年齢にしてはズいぶん難しい言葉を使うのね。ああ、ごめんなさい。馬鹿にしたわけじゃないのよ。

……でも、ごめんなさいね。私は彼のことは話したくないの。彼のことは終わったことなのだから。

ああ、……ごめんなさい、ごめんなさい。どうか、どうか私を赦してください——



僕——冬已吹雪が生まれたのは十数年前の冬のことだった。その時の僕はただ一人の肉親である母親に祝福されて生まれてきたよ。その時はとても雪が強い日だったらしくてね……まさに吹雪の日だった。その日に生まれたから、僕の名前は吹雪になったそうだ。

それから、母が風俗で働き始め、文字通り体で稼いだ。僕はその、世間で見れば“汚れた”お金を、軽蔑されながら僕のために稼いでくる母を尊敬していて、誇りに思っていた。……一度も口にしたことはないけれどね。

あるとき、母が孕まされた。仕事帰りにレイプされてしまったそうだ。それを伝えられたのはだいたい五年前だったから、今でもありありとその光景を覚えているよ。それを言われてから、そういえば、その数日前に母が泣きながら家に帰ってきていたな、おもった今思うと、僕は母に対する愛情が足りなかったのかも知れない。

その後母と今後を話し合い、子供は産む方向で決めた。それが隆一だ。とても素直でいい子だが、僕に少しにている。

だったら、僕の気持ちが変わるだろう。

愛を注いでいた人物に、裏切られるこの気持は。

ああ、あなたが僕に赦してと言っても、ぼくはあなたを絶対に許さない。

夏の思い出

僕の十二歳の夏、両親の離婚騒動がぼくの夏休みの最後の思い出となるだろう。離婚すると言い出したのは今朝。僕がねたあとになにやら口論していたが、それが原因だったようだ。たしかに少し前からギスギスした雰囲気は漂ってはいたが、まさかそこまで発展するとは思っていなかったため僕は面食らってしまった。

夏の終わり頃であった。見上げた空には黙々と入道雲が立ち上っていて、スズメがちゅんちゅんと鳴いていた。空は僕の心情とは真逆で、爽やかそのものだった。普段なら、それに影響されて僕の気分も少しは爽やかになるのだろうが、生憎僕の気分は晴れることはなかった。

シックな色の家具で装飾された部屋の中央に備え付けられた円卓を囲むのは、轟々（げげげ）しい化粧と服装の、三十代くらいに見える僕の母。こんな化粧をするのは今日が初めてだ。そして向かいあって立つのは、スポーツマンのように肉付きの良い、それなりに整った顔立ちの男性。銀縁眼鏡でゴルフウェアを着た父は、縁側に座る僕に向かって、母と同時に「離婚する」、と言い出したのだ。ちなみに僕は黒染めの浴衣である。

彼らは僕の言葉を待っていた。自然、緊張してしまう。覚悟を決めて僕は口を開いた。

「どうして、別れるんですか？」

それが疑問点でもあった。とたん、両親はキツ、とお互いを睨み

合い、口をそろえて言った。

「鍋の好みの違い」

はい？ と僕は耳を疑った。だがこれは現実のようだった。信じられない。そんなくだらないことで、――僕は言葉を飲み込んだ。

「だいたい、なんでモツ鍋に牛肉なんだ。臭いが移るだろう」

「それをいったらアンタだって――」

なんだと貴様あ！ やんの、ええ！？ と、常人の感性から完全に外れているような「ありえない」ことで口論を始める。

モツ鍋には鶏肉だろうと僕は思うのだが、どうやら両親にとって「ありえないこと」らしい。

口出しできない。僕は立ち上がって草履を履き、庭を通って家を出ようとした。が、父は目ざとくそれを捕捉し、

「取り敢えず、どちらについてくるか決めるんだ」

と言った。母もそれに同調するように首を縦に振っていた。

即答できるはずがなかった。人生の大きな分岐点である。それに、これを答えてから仲直りでもしたら、片方からの信頼が地に落ちる可能性があるのだ。それならば、今ここで答えないほうがいいだろう。僕はそう判断し、時間をください、といった。すると父は、「一日待つ」と言った。それが僕の猶予だった。けれどその間に決めきれるとは到底思えなかった。僕は両親に会釈して、燦々と降り注ぐ日差しのもとに身を晒した。

「さて、……どうすればいいんだろうか」

日課の散歩コースを通る僕は、憂鬱だった。やけ気味に空を見上げる。煌々と輝く黄金色の球体から降り注ぐ紫外線に素肌は灼かれていく。自宅近くよりも特別日光が強く、かもめの「きやあきやあ」という甲高い声が煩い^{ひびく}こは、いつもなら穏やかな波の音が心を落ち着かせてくれる。だが、今日はかもめの声がひどく遠くから聞こえている気がするほど、中央分離帯を隔てて向こうに広がる砂浜では男や女たくさん居て、大きな声で戯れを繰り広げていた。その甲高い声はかもめを軽く凌駕する。

いつもなら海に向かって日頃の鬱憤でも叫ぶところなのだが、生憎と今日はそれをするつもりにはなれない。戯れている「彼ら」が僕の気持ちを聞いたところで理解できるはずはないだろうし、たとえ声をかけるとしても「傍観者」としての意見しか言わないだろう。それを許容せずに、怒り出す者も入るだろう。彼らには僕の気持ちには到底理解出来ないだろう。このような、「大切なモノを失う危機」に瀕したことがないだろうから。彼らの戯れを隠してくれる、中央分離帯に生える木々は僕の味方だった。

あの声だけでも憎々しいというのに、それに加えてあんな楽しい様を見ていると、負の感情のスパイラルが引き起こされたであろう。今の僕はいつにもまして卑しいヒトになっているから。

戯れの源から離れ、自然公園沿いを歩いていると、前方からまっすぐ、僕に向かってかけてくる人物がいた。

一体誰だろうか、そう思った瞬間に“それ”は僕に飛びついた。

「よう、ルブラン！」

「あ、アガサっ！ いきなり飛びつくんじゃないっ」

勢いのまま押し倒される。女性らしい柔らかい体に押しつぶされながら僕は彼女に無言の抗議を行う。重たい、重たい。

「なかなか喜ばんな。せっかく押し倒してやったというのに」

「取り敢えず、ルブランというあだ名はやめてほしいんだけどね」

僕の上から退いてくれた彼女は、ふんすと擬音の付きそうな表情で僕に言う。

「それをいったら君はいい加減私を名前で呼びなよ。小学校も今年で最後だっていうのに」

「君がやめたら僕もやめる」

三年も続けたら、そりゃ渾名にもなるかもなあ、と思いながら僕は言う。

彼女――アガサとは生まれた頃からずっと一緒だった。幼稚園、小学校、小学校でのクラス、席……なんの偶然が重なってか、どうあがいても彼女は僕と共にいた。クラスはずっと一緒、席は毎回隣。となりじゃなくても前後。

「でも、君もまんざらじゃないんだろ？　なんたって、モーリスⅡルブランの信者みたいなものだからな」

「ファンと言ってほしいね」

僕が彼女を“アガサ”と呼ぶようになったのは小学校三年生の、春先のことだ。朝読書の時間に僕はモーリスⅡルブラン傑作集？「ルパン対ホームズ」を、彼女はアガサⅡクリスティの「そして誰もいなくなった」を呼んでいたことに気づき、彼女がおふざけ半分に僕のことを「ルブラン」と、僕が彼女のことを「アガサ」と呼んだ

ことから始まった。

その頃には僕らはお互いをミステリ好きという認識があった。本の好みは全く一緒であることはとくに気づいていたからだ。といっても、食の好みは違おうし、タイプの異性は勿論違う。性別が違ってくるからだ。

「で、浮かない顔だな」

「そう見えるかい？」

「ああ。犯人に出し抜かれたシャーロックⅡホームズの顔だ」

どんな顔をしているのだろうか。けれど、なんとなく想像できた。さぞかし悩み深い顔だろう。悩みのタネを話すか否かで少し迷ったが、事の経緯を話すことにした。すると彼女は小さく、ふうんと呆れ気味に鼻を鳴らして「そんなことか」と、彼女は吐き捨てた。

「そんな事って……僕にとってはとても重要なことなんだけれど」

腰まで伸びた茶髪をはらって、彼女は僕の言葉を意にも介さない様子で、自分の話を続ける。

「分岐点が提示されているだけでもありがたいね。五歳の頃に母が死んだことは、君も知っているだろう？　くも膜下出血で、選択肢なんて提示されなかったんだ。赤ン坊同然の弟と家事なんて出来ない父のせいで、私は若い頃から家事全般をこなしていかなきゃならなかったんだ。だから今ではまともに恋する乙女も出来やしない。父の加齢臭と、今でも泣きついてくる弟の面倒を見る毎日さ。

君に比べれば、私のほうがとても大変のように思えるんだがね。君はどう思う」

「……まあ、そうかも知れないな」

「当時の話をしよう。弟のおむつを替える時だ。最初はあるものは本当に嫌だった。なんたってくさいしな。父は手伝う素振りすら見せず、興味も持っていなかった。あの頃の私がやらなかったら弟のおむつ替えはいったい誰がやったのだろうかと思うよ。もしかしたら、幼い弟が自分でできるようになったかも知れない。

ま、夢物語だがね」

「確かに、冗談にしては上出来とは言えないね」

それから僕らは自然公園沿いを二人きりで談笑しながら歩いた。といっても主に彼女が当時の愚痴や、最近の悩みを僕に言うだけなのだが。けれど僕はそれが全然いやではなく、昔から一緒にいたアガサが僕の知らないことだらけだという事実が提示されて半ば驚いていた。

「興味も、出てきたな」

「……？ 何に對して？」

きょんとした様子で彼女が僕に尋ねる。下から見上げるように、若干上目遣いでだ。改めて見てみると、彼女はとても可愛い。長く一緒にいたからだろうか、彼女の魅力に気づくことはなかった。そういうえば、学校の友人は案外アガサを狙う男子は多いと言ったわけ……

「……結局なんなんだ？ 気になるじゃないか」

これが生殺しというやつか、と彼女は呟く。

彼女の愚痴を聞いているうちに、僕の悩みは「そんなこと」になっていた。気づけば僕の「卑しさ」は消え去りいつもの調子に戻っていて、半ば一心同体の彼女といたおかげだろうか、と僕は思う。

日が暮れる。自然公園に入って頂上^{てっぺん}まで登った僕らは、オレンジ色に染まった街を見下ろしていた。アガサの愚痴は、いつの間になくなっていった。

「それで、結局何に対して興味が出たんだ」

「いや、卑屈だった気分がもとに戻って清々しくなってね——もっと知りたくなったんだ」

「何を？」

「瑠唯^{るい}のコトを、だよ」

うあ、と小さく呻いて彼女はそっぽを向いた。その横顔は橙色に染まっているように見え、ほんのりと赤みがかっているようにも見えた。

それが夕日のせいかどうか知っているのは、彼女だけだろう。



モヤモヤとしたカーテンに、眩い光が差し込む。僕はまどろみから覚め、ベッドの上で状態を起こし、ぐっ、と体を伸ばした。僕は着替えもせずに扉を開き、自分の部屋から階段まで続く廊下を通り、階段に備え付けられた手摺に体重を任せて一階に降りる。それからダイニングへと続く廊下を少しふらつきつつ歩く。まだ意識は覚醒しきっていない。

扉を開ける。

「あら、おはよう。今日はちょっと遅いわね」

「そうだぞ。お前も健全な高校生なんだからもう少し早く起きろ」

「とか言いながら、あなたは今日の朝私に起こされなかったら何時起きたことだか」

「はは、言うなよ」

昨日の離婚騒動がなかったかのように、彼らはバのつくカップルぶりを披露し始めていた。やはり、アガサの言ったとおり僕の悩みは杞憂に終わった。彼らのバカップルぶりはよく解っていたはずだが、近くにすぎたせいで少し感覚が麻痺していたようだ。少し離れたところから見ているアガサのほうが、よく見ている。

母は薄化粧しかしておらず、その整った顔立ちは実際の年齢とは大きく違い、二十代前半のそれにしか見えなかった。

そのまま朝食に入る。今日は西洋風の料理だった。昨日は和風、一昨日は中華、……ローテーションしているのだろうか、と僕はその時初めて疑問に思った。

「ね、カズ君。どう、美味しい？」

「そりゃ、りいちゃんの作るものが美味しくないはずないじゃないか」

「言ってくれるねえ、大黒柱っ」

「はは、どうも」

今日の母は昨日とは打って変わって薄く塗られたピンクの口紅以外には特にならない。素のままだ。それでいて、とても綺麗だ。父は昨日と全く変わらない。これが、この家の日常なのだと思いついた。あまりにも毎日繰り返し広げられていて、失って初めて気づいた。音も立てずにフランス料理を食べていく僕ら。浴衣をきている僕がひどく浮いている気がした。そして、先程から会話しているのが二人だけなので、意を決してそれに割って入る。

「ね、ねえ、父さん」

「ん？ どうした、和成^{かずしげ}」

「昨日の話なんだけど……」

「昨日？」

と、そこで父は首をかしげた。もしや、既に無かったことにしているのだろうか。

早い、早過ぎるぞ我が父よ。母も覚えていないみたいだし、ぼくは言及する気を亡くしたため、「なんでもない」といつて食事をほおぼる。

「……」

と、そこで、母がじつとぼくを見ていることに気がついた。

「どうしたの、母さん？」

「いや、機嫌いいなーって。シゲちゃん、何かいいことあったでしょ」

「いや、特に無かったけど」

「いや、あったね」

「いや、無かった」

いや、で始まる会話がそれから五分くらい続いたが、確かに無いことはない。だが、それを話すことはとても気恥ずかしかった。

「取り敢えず、僕出かけるから。十分くらいあとに出かけるね」

「おお、珍しいな。散歩……じゃなさそうだな」

「瑠唯を待たせてるんだ」

すると父は、「ははーん」と言っけてにやにやし始めた。なにかまずいことを言ったかな、と思い、僕は首を傾げる。

「デート、頑張ってこいよ」

昨日の時点で、ぼくは自分の気持ちに気づいた。そして、その場で告白した。彼女は初め、少し驚いたようにそれを聞いたが、彼女はすぐに涙を流し始めてしまった。驚き、声をかけると彼女は、「いままで君が私の気持ちに気づかなかったから、ずいぶんさみしい思いをしたんだぞ」と言った。

言われてみれば、彼女が自分を女性として見ろ、といったアピールはずいぶんしていたような気がしたが、僕に取っては幼馴染のすることという一括りの中にはいっていた。何時から彼女は僕を気にしだしたのだろうか、少し気になったが……それでも、相思相愛の仲になることが出来たのは僕に取ってとても嬉しい事だった。

お互い、一番近いところにいながらも知らないことだらけだ。僕はこの関係を、とても大事にしていきたいと思う。

どうやら、夏の最後の思い出は両親の離婚騒動ではなく、好きな女の子と相思相愛で、付き合いだしたということになりそうである。

夏の思い出（後書き）

学校で書いた三題噺のリメイクです。

少年の一日

リクヤは暇を持て余していた。志望した高校に入学し、彼はするべきことを終えたとばかりに、中学校を卒業してから十数日を自室で過ごした。勿論両親には事情を話しているため心配されることはない。

リクヤは虚ろな瞳で机とにらめっこしていた。木製の椅子に腰掛け、寝間着のまま、閉められたカーテンの隙間から差し込む光に照らされていても、彼は微動だにしなかった。まるでバッテリーが切れた機械人形のように。ピタリ、……と。

そのとき、彼から数メートル離れたところに佇む扉が数度叩かれた。無論、リクヤは反応しない。ただ、眉をピクリと動かしただけだった。

――リク、今日は入学式の日だぞ。

入学式という単語に反応して、リクヤは顔を上げた。

「行くよ。約束だからね」

止まっていた彼の時間が、動き始めた。

十数日間、一步も動かずに引き籠っていたとは思えないほど機敏に彼は着替え、食事を済ませた。彼の両親はその様子を怪訝けげんそうに見ていたが何も言わなかった。彼は両親の気持ちに気づいていたが無視し、顔を洗い、伸びていた髭を剃って、それから出かけた。

既に彼の頭髮は肩まで伸びている。整った顔立ちには薄い影が差しており、それが一種の神秘性を作っていた。通りすぎる人々は彼を見て、それから笑いながら彼について話す。話す内容は様々だが、女は「格好良いね」、男は「気味が悪いな」という話が多かった。

それを全て聴き、それでも彼は歩き続ける。それはどこか機械じみていて、無機質だった。

横断歩道に差し掛かった時だった。赤信号だということで彼はピタリと歩みを止めた。だが、先程から彼の近くを歩いていたカップルは赤信号だということに気づかず、談笑しながら赤信号を無視する。

「危ないっ！」

誰かの声が響いた。耳を劈くクラクション。横断歩道に中頃まで行った彼らは飛び出してきたトラックに撥ねられた。鮮血が辺りへぶちまけられ、肉塊が転がる。

見れば、トラックが飛び出してきた方向はまだ赤色だった。ゆっくりと黄色へと変わり、それが青信号へと変わる。

その数瞬に、悲鳴が上がった。

「え、この時ってどこに電話すればいいの？」「警察じゃね？」「そのまえに、救急車——」

ざわざわと騒ぎ始める。騒ぎを聞きつけた野次馬が集まってきた。とても近いところで事故の様子を見ていたリクやは、興味を惹かれたようで事故の被害者のもとへと歩み寄った。

「大丈夫ですか？」

唖^{しゃが}れた声で、彼は尋ねた。久しぶりに口を開いた彼の声は、それでも不思議と透き通った水のようによく響いた。だがその声は車輪の下に血溜まりを作っている二人には聞こえていないようだ。

「リコ……生きてる？」

「う、んっ。私、は、生きて——」

男の上に被さるようになっていた女は、それを最後に息絶えた。間もなく救急車が到着したが、その時には男も息絶えていた。

それを見届けてから、彼は小さく呟いた

「幸せと絶望はいつ訪れ、いつ終わるか解らないものなんだな」

彼の目は輝いていた。二人を搬送した救急車が見えなくなるまで、彼はそれを見つめ続けていた。辺りに、桜の花びらが舞い散っていた。……

少年の一日（後書き）

小説を書こう参加作品です。こっちにだすのが妥当と思いこちらに投稿。

僕と彼女の関係

僕は起きて最初に、彼女と目を合わせるようになった。目覚めて観る最初の光景が女子の顔ということは喜びに価するものなのかも知れないが、彼女の表情があまりにも薄い、暗い笑みと、その裏に隠しきれない怒気が感じ取れたら、引きつった微笑しか浮かばない。「えっと……おはよう？」

「もう昼だよこのヤロウ！」

頭突きをお見舞いされた。寝ている間に押し倒すかのように僕との距離を詰めていた彼女は僕の方を掴んで上体を起こし、その可愛らしい陶磁器のような額を僕の額に打ち込んだ。僕は痛くて「くう」と小さく漏らしたが、彼女はもっと痛いらしく涙目になっていた。額が赤くなっている。居た堪れなくなつて、僕は彼女に謝罪した。

「アンタが私の怒っている理由を当てれば殴らない」

「……はあ」

「で、理由はなーんだ」

「……今日、一緒に買い物にいく、とか」

「残念」

ごん、と頭頂部に重い一撃を喰らう。ついに目尻に涙が浮かんだ。漸く満足したのか、彼女は僕の上から退いてくれた。しかし彼女は床の上に脚の置き場がないとわかると、「失礼しまーす」僕の上に跨った。

「取り敢えずどいてくれるかな」

「変なところおったてちゃって、変態」

「一体僕がどこをたてているのか教えてほしいね」

取り敢えず上体を起こし、彼女の股下から脚を引きぬく。工具や電子機器の部品で埋まった部屋を中心に位置するベッドから出て、僕は足先で道を作りながら部屋をでる。そこで、高村光太郎の「道程」という詩を思い出した。

作業部屋から出て、自室で着替える。着替えを済ませて時計を見ると、十二時はとうの昔に過ぎていた。

「それで？　どうするの？」

「雨が降っても火事が起きてもアンタは私についてきなさい」

「流石に火事の時は消防を呼ぶよ」

「じゃあその消防の方も一緒に連れていくわ」

「君が『二人きりがいい』と言って約束を交わしていなかったら僕もそうしたと思う」

「約束覚えてるじゃん」

「思い出した」

取り敢えず、行こうか。そう言って僕に付いてきていた彼女の手を取って家を出た。

映画を観ることになった。内容はコメディだ。全世界で親しまれている某コメディ映画の最新作である。日本人にはあまり馴染み薄いものだが、イギリス人の三世である彼女の両親も、祖父母もどちらも海外文化にとっても通じている。その影響で、彼女は見た目、純日本人のそれだが、外国人的嗜好を持ち合わせているのだった。

そのギャップが、どこか、いい。

それを抜きにしたとしても、何も無いところで転ぶところも、いきなり押し倒してくるところも、僕の作っていた機会を破壊してしまうドジも、何もかも許せる。惚れた弱みというものだろう。彼女は憎めない人という概念を体現していた。

そんな彼女が僕の気持ちに気づいているはずはない。

（よしんば、友達としてしか見られていないだろうなあ）

僕の気持ちに気づいてくれればいいのに、と思いながら、もしも気づかれたらどうしようかと想像して、その妄想を打ち消した。

「ね、次はどこに行こうか」

「ん？　僕は特に希望なし。君の行くところが僕の行くところだから」

「えー……面白くないの」

赤くなりつつそう言って、彼女は小さく微笑んだ。

「じゃあどこかに行こうか」

「まあ、どこでもいいよね」「ショッピングに決まってるじゃない！」

「どこかっていつていたのに一択だった!？」

まさか選択肢がひとつだけとは思わなかった。

さーて、行くわよ! と彼女は意気込んでいて、僕はそんな彼女の様子が微笑ましかった。

ショッピングはなかなか楽しかったと思う。

彼女の提案で夕暮れの街を歩き、僕と彼女は公園にたどり着いた。ここは子供の頃から彼女と一緒に来ている場所である。その頃から機械くらいしか興味を示さなかった僕に友人と呼べる人物は彼女を除いたとしても十人に満たない。けれど僕を理解してくれる人物はその数名のみにほかならないのだ。その中の、彼女を除いた全員が引越したりして、僕から離れてしまった。

残る僕の理解者は彼女一人。そんなことを思いながら、僕らはただ黙っていた。

「ねえ、――アンタ、私のことどう思ってるのよ」

「……どう、って?」

「言葉通りの意味」

そう言われて、ぼくはしばし考えた。なんと答えるべきだろうか、ここでぼくが彼女のことを好きだということを洗いざらい告白するべきだろうか――

「アンタ――いや、流くんが私をどう想っていても、私は君のことが好きなの」

そう言われて、僕は彼女を見た。冗談を言っている様子はなかった。

「だいたい、根暗な機械オタクと友達付き合いを続けるような物好

きは基本的にいないわよ。……いや、根暗じゃないわね。筋金入りの機械オタクで、そのくせイケメンで、性格も男前で……そんなやつ、普通だったら残念男子ってだけで終わっちゃうのよ？

あーあ、私は何でこんなやつに惚れちゃったのかな。

教えてくれる？」

冗談交じりといった風に、彼女は僕に問うた。

「それを言ったら、君は天然さんのワガママちゃんだ。そのくせ美人で性格も優しく、手先は器用なくせに心は不器用なところなんて見せられたら惚れない男はいないさ」

僕の言葉に、今度は彼女が面食らったようだ。笑いながら、僕は言う。

「付き合ってみる？」

「冗談。アンタみたいな人と付き合うようなバカはいないわ」

と、そこで彼女は一旦言葉を区切り、「結婚なら、あんたみたいな人になりたいわね」といった。「君は、本当に憎めない人だね」

「アンタも、憎めない人じゃない」

僕は笑った。

そうして、僕の恋は実った。

機械よりも愛している彼女は、これから毎日僕のとなりにおいてくれるのだ。

僕と彼女の関係（後書き）

小説を書こう！ 参加作品。
恋愛ものとかだいっきらいだ……OTL

僕の日常（前書き）

三題噺お題

目，服，下克上

僕の日常

「えー、応仁の乱以降、日本には下克上の風潮が……」

教師の声とチョークの音が響く中、僕はまどろんでいた。先程から授業の内容などはこれっポッチも頭にはいつていない。それどころか子守唄替わりである。睡魔、恐るべし。

幸いなのは教師が僕の睡魔との戦いに屈しそうなことに気づいていないことだろうか。秘技チョーク飛ばしが来ないことを願おう。

睡魔軍が眠気光線を送り出した。もう無理だ。おやすみなさい。突っ伏する。しかし、後ろから小突かれた。

「起きて」

小突かれた後、つねられた。脇腹を思い切り。ご丁寧に爪まで立ててくれて超痛い。思わず声が出そうになるが、耐える。だがおかげで睡魔軍は全滅、眠気光線照射器は衝撃波で破壊されたようだ。

子守唄が説明に互換され、僕の意識は覚めた。

「起きたよ」と僕は言っ、右手を動かして脇腹をつねっている手を退ける。ふにふにしている温かかった。思わずときめきそうである。ときめかないけど。

僕が服の上から彼女の手をのけると、彼女は自分から手を引つ込めた。ありがたい。そして、丁度授業が終わった。教師が宿題の範囲を言う。それをメモる生徒。教科書パラ読みしている僕。どうせ宿題の範囲は終わっているだろうと余裕ぶっていたが、しかし不安になったので後ろを見て、宿題の範囲を写す。

「起立、気をつけ、礼」

「ありがとうございましたー」

淡々と学級委員が述べ、ようやく授業は終わった。皆異口同音の文句を吐き出す。疲れた、眠いが殆どだ。僕は改めて振り向くと、先ほどのお返しをしてやろうと手を伸ばした。

が、振り返った瞬間にほっぺをつねられた。

「痛ええええええええ！」

「ヘンなことしようとしたから」

真顔で言われた。超痛い。脇腹の何倍だろうか。脇腹の痛みが霞んだ。再度進行しそうになってきていた睡魔軍はついに全滅した。さすが西川西川強い

「取り敢えず離してくれ」

「うん」

ばちーん、と引っ張られた。余計に痛い。髪の毛を抜くんじゃないんだから僕のほっぺを持って行こうとしないでくれ。洗濯ばさみのほうが未だましな気がする。いつから女尊男卑の構図が出来上がったのだろうか。

「今日はつねったり引っ張ったりか」

「シャーペンで目玉を突き刺すよりはましだと思って」

「その選択肢がある時点で大問題だということに気付こうか」

「大丈夫だ、問題ない」

「真っ向から意見を否定しやがった!？」

帰ってこい僕の日常。

僕がこの娘――西川こころに出会ったのは、三ヶ月ほど前だ。つまり、入学式のあった4月。彼女が僕の、入学して最初の友達となったのは偶然か必然か、いまでも謎である。

馴れ初めはこうだ。たまたま放課後教室に残って掃除をしていたら、たまたま忘れ物をした彼女と出くわし、それを探してあげることになった。その最中に文学の話題で盛り上がり、遅くなったので送ることになったら、たまたま家が近くて、彼女の提案で一緒に登校することになり、気づけば毎日一緒に登校する仲になった。たまたまが多すぎて怖い。作為を感じる。

へるぷみー。かわいい女の子は実はバイオレンスだった! He

yそのクラスメート、僕と変われヨ!

そんなことを言っても無視されるだけだろう。もしくは嫉妬の視線を向けられるだけである。僕は諦めに近いものを感じながら、思

わず尋ねた。

「ねえ、僕に迷惑をかけることができて嬉しい？」

「いいえ」

「じゃあなんで？」

「楽しいから」

その笑みが、僕を突き放させないミソなのだろう。
男は女の笑顔に弱いのだ。

そんな感じで毎日が過ぎていく。

僕の日常（後書き）

体験談を交えてやっています。

嘘のようなあとがきシリーズ

そういえば以前、僕は友人に「色男」と称されたことがある。一体なぜだろうか。推測するに、その時の状況はこうだ。

仲のいい女子三人組と一緒に帰った後に別の女の子と遊び、その子が帰った後に図書館だかに行ったら仲のいい女友達がいる色々雑談しながら云々。その話をしたんだと思う。

しかし色男の定義とはなんだろうか。女子の友だちが多いことが色男の定義なのだったら皆が皆色男ではないのだろうかと思う。

出立の日

一

福岡空港にて出国手続きを終えた彼は、急ぎ足で搭乗ゲートに向かった。だがまだゲートが開いていないことを知ると、興奮して赤くなった顔をさらに紅潮させ、待つ間、気忙しくそこらじゅうを歩き回っていた。

ビジネスクラス以上の客が並びだす頃には、彼はぐったりとしていた。本末転倒であった。彼はエコノミーはまだか、と疲労の蓄積された足を揉みながら、先程から機内へと消えて行く人々を恨めしそうに見ていた。

（思えば、随分遠いところに行くんだな）

イギリスは日本から何キロメートル離れているのだろうか。彼はそれを知らなかった。

彼がイギリスに行くのはこれで二度目だった。一度目は中学生になる少し前の春、留学生としてだ。当時憧れていた先輩と共にイギリスにいけるといふのだから、彼はその時滑稽なまでに張り切っていて、いざ行くとなった途端、ガチガチに緊張した。

当時のことを回想しながら、彼は苦笑した。若さっていいな、と彼はつくづく思った。当時の自分が、将来を夢と希望に満ち溢れたものと思っている。彼は今すぐにでも無知だった頃に戻りたかった。そして、楽な生活をしたかった。

（先輩に告白する、ってのもいいな）

結局彼は彼女に告白することなく、高校で別のところに行き、道を違えた。煌々でも恋愛はしたが、彼は当時ほど熱中しなかった。彼は五年前に、一度件の先輩に会ったが……

（熱は冷めた、か）

当時の彼は十年後にイギリスのケンブリッジ・カレッジから招待

されるところは思っていなかっただろう。想像したとしても、旅費が自己負担というのは信じられなかっただろう。

エコノミーの客が並び始めた。彼は急ぎ足でそちらへと向かった。そこでふと、彼は件の先輩がイギリスに行くことになったという話を思い出した。

(……まさかな)

ケンブリッジ・カレッジから招待されたのは男女のペアだ。その男が自分だとしたら、女は？ 淡い期待を抱くが、彼はその妄想を振り払った。

もう日本とはお別れである。おそらく帰ってくるのは三年後になるだろう。その頃には、こんな妄想に囚われるはずもないはずだ。

彼は自虐的な笑みを浮かべつつ、雑踏の中に紛れ込んだ。

「晃君^{ひかる}っ！」

名前を呼ばれなかったら、彼は立ち止まらなかっただろう。少し後ろの方に、息を切らして、膝に手をついている、小柄な少女がいた。

肩にかかった黒髪に、それなりに整った目鼻立ち。そして、目があったときに魅せる向日葵のような笑顔。

彼の考えていたまさかは、現実となった。思わず彼は列を離れ、彼女に駆け寄った。

「さつき……？ どうして」

「私も行くからに決まってるじゃない。久しぶり」

彼女は、満面の笑みで彼に言った。

二

偶然、彼らの席は隣だった。勿論行き先も。彼女——さつきは、大学は、所謂二流大学に入学したが、そこで猛勉強の末主席を取り、ケンブリッジに留学したいと志願書を書き、そしてようやくイギリスに行くことになったと話した。

「いや、浪人しちゃってさ。……かなり大変だったんだあ」

「意外。てっきり現役で通ったとばかり」

「テニスばかりやってたのが、失敗。おかげで晃君と同じ学年になっちゃった」

彼らは、昔話や、接点のなかった高校時代の話をした。勿論恋愛談もあった。彼女は恋愛を経験していたが、どれも三日坊主ですぐに別れていた。

彼は、なんとなく「どうして？」と尋ねた。彼女はいたずらっぽい笑みを浮かべて「秘密」とはぐらかした。

その時彼は、己の熱がまだ冷めていないことに気がついた。どれも熱中できなかったのは、心のどこかで彼女を想っていたからだ、と彼は悟った。

(けど、もういい)

彼は小さく笑った。彼女につりあう人間は、自分ではないと思っていた。今回彼女と話をして、彼は改めてそう思った。

根暗で、勉強ばかりしている自分が、どうしてこんな、太陽みたいな人とつりあうのだろうか。自虐的な笑みを浮かべる彼に、彼女は首を傾げていた。

「ところで、どうして？」

「……へ？」

「ほら、猛勉強したって言ってたじゃん。……なんで？」

それでも、彼は希望を捨てられなかった。女々しいと思いつつも、彼は質問をしたかった。

それに、彼女なら別の場所を目指したはずだ、と彼は考えた。中学生時代から彼女はテニスにその情熱を向けていた。母親曰くその情熱は未だ尽きていないようで、それを聞いたときに「彼女らしいな」と彼は思ったが、しかしそれならば、テニスの名門に行くのではないだろうか。

「秘密……にしたいけど、聞きたい？」

彼女は躊躇いがちに言った。彼は頷いた。

「それはね――」

彼は、己の恋慕が実を結んでいたことを知って、運命の神に感謝した。

出立の日（後書き）

嘘のようなあとがき。実質的には本当かも知れないあとがき。

ごめんなさい、ネタがありません（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9929p/>

短篇集_現代

2011年8月9日03時14分発行